moonnight

夏香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｍｏｏｎｎｉｇｈｔ

【Ｎコード】

Ｎ１２２７Ｄ

【作者名】

夏香

【あらすじ】

ヘタレ吸血鬼と天然少女との恋？話ラブになるかは…二人次第（笑）

ｐｒｏｌｏｇｕｅ－変質者と私－

１）ｐｒｏｌｏｇｕｅ

今宵は満月。

目の前には黒ずくめの長身の男。

さて…どうすればこの状況を打開できるか。

・

「Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ…お嬢さん」

恭しく頭を下げる男。

そして滅茶苦茶引いている私。

塾帰りのいつもの帰り道だったはずなのに…

変な男がなんか話しかけてきた。

「お嬢さん…ちょっと僕とお茶をしないかい？」

おいおいおい…誘ってきたよ。

も、もしかして…！！

お茶に誘うと見せかけてエロビデオとか詐欺紛いのことをさせるきじゃあ…！！！

「あの～これから家に帰るのでどいて下さい」

私は冷たくあしらおうと心に決めた。

そんな事を言うと男はショックを受けたような顔になった。

何か罪悪感が…

「そんな…僕の計画が…」

うなだれて落ち込む男。

私は声をかけてみた。

「あの～」

「今時流行りの”ちょい悪“にしてきたのに」

男の格好は黒尽くめで西洋紳士のような格好だ。

ちょい悪っていうか悪の首領だよ。

ゲームとか漫画とかで言うとラスボス前に居るぐらいの怪しい格好。
着いてったら火傷所じゃなくて燃えちゃうような格好だよ。
「僕の食事…」
なんか泣き出したよこの人。
はっきり言うならば気持ち悪い。
「貴方…何なんですか！？警察呼びますよ」
脅しをかけてみた。
すると男は泣くのを止め始めと同じように格好つけて立ち上がる。
本当なんなんだよコイツ。
「警察…？それは困る。実は僕は吸血鬼なんだ」
「サヨウナラ」
体を半回転させてその場から去ろうとする。
いきなり吸血鬼は無いよな吸血鬼は。
そうだ、これは幻覚なんだ。
夢だよ夢。
私はそう思うことにした。

「ちょ…ちょっと待ってよ！！」
男に肩を掴まれて引き戻される。
私は生暖かい目でその男を見やる。
「そんな目で僕を見ないで」
「だって…」
頭おかしいんじゃないのこの人。
赤の他人に話しかけてきたと思ったらいきなり泣き出すし。
その上吸血鬼だって？
「有り得ない有り得ない」
「じゃあ証拠みせる」
そう言うと男は口を開いた。
その男の口をじっと見たら二つの長い牙が生えていた。
「凄い発達した犬歯ですね～」
「違っ！！吸血鬼の牙だよ」
「信じられないなあ」

「じゃあ」

今まで情けない顔をしていた男がすっと真面目そうな顔になる。

な、何……？

気が付くと男は消えていた。

身を引く私に何か生暖かいものが首筋に当たる。

ぬるりとした舌のようなもの…って！！

男は私の首筋に口を触れているのだ！！

私は頭の中でパニックを起こす。

きも、気持ち悪っ！！

ああ、そう言えば。

最近この辺に変質者が出るから気をつけなさいと母と先生に言われてたっけ？

今頃そう言うこと思い出しても遅いのに。

今までの思い出が走馬灯のように走り出す。

購買で他の生徒を追い抜いてプリンをかっさらってるとか。

コンビニでおでんを注文したとき、横にいる友人に引かれたときと

か。

自宅帰りのケーキとか。

……って！！

何で食い気に関するものばかりなんだ！！

他にないのか私！！

そう頭の中で思っているとチクリとした感覚が首筋に発生する。

「あっ…痛っ！！」

どくりどくり。

心臓の音がこんなに聞こえたのは久しぶりかもしれない。

去年の1月のマラソン以来だ。

ああ、そう言えば今年もマラソン大会有るんだよな…。

スポーツで一番嫌いだもんな…マラソン。

そんな事が頭をよぎった。

男は暫くすると離れる。

「…これで信じてくれた？」

何が？

キョトンとして男を見たら男は自分の首筋を触るように指示した。

私は恐る恐る触れてみる。

そこには小さな二つばかりの穴が開いていた。

「貴方も見たことあるでしょう？吸血鬼のか・み・あ・とってやつを」

思考が止まった。

「貴方の血はまあ普通だったけどごちそうさま。これで一年は生きてけるよ」

「お…」

「お？」

「お嫁に行けない――――！！！」

気づいたらそんな事を口走っていた。

とっさの発言だったので言った瞬間自分も男も固まった。

「どうしてくれるんです？」

言った手前もう戻れなかった。

私は男に詰め寄る。

「え…？あ、あの…」

困ったように子犬のような目線が来たが無視する。

「私を傷物にしてどうしてくれるんです？」

傷物は言い過ぎだと思ったが、構わず進める。

「いや…あの…」

「それともアレですか！？貴方が婿になってくれるんですか？」

「君、僕の趣味じゃ…」

大丈夫。貴方も私の趣味じゃない。

私の趣味はこんなへにょった奴じゃなくて無精髭のがっちりしたひとだから。

「こんな目立つところに傷物を付けて。明日学校なのにどうしてくれるんですか？」

絆創膏はってもこの傷は目立つだろう。

「……」

男はとうとう言葉に詰まったようだ。

口をつぐみ沈黙する。

私は強めにもう一度言ってみた。

「どうしてくれるんですか？」

少しの沈黙。

「……うわーん！！ごめんなさいー！！」

そう言うと男は泣きながら飛び去っていった。

……言い過ぎたかな。

まあ、いいか。

そんなこんなで私は帰路についたのだった。

続く

1．貴方、会った事有りますよね

1．貴方、会ったこと有りますよね

．

「で、あんたは男を泣かせて家に帰ったってわけ？」

不満そうな仕草を見せる美由紀。

何が不満なのだろうか。

「不満よ不満！！」

やばっ！！

考えてたことバレてる！？

「男と女が出逢ったらやることは一つでしょう！！」

やる事ってナンデスカ？

分からず頭を捻っていると美由紀が呆れたように溜め息を漏らした。
「あんたねぇ…どんだけ鈍感なんだか…で、そいつはどんな奴なの？」
「そうだなぁ、うちのクラスで例えるなら」
指さそうと腕を上げた瞬間。
見覚えのある姿が目の前を横切った。
「あ」
「え？」
二人とも一言発したまま固まる。
あれ？
見たこと有るよこの人。
確か…この前あの夜に…。
「あああああ！！！」
何時の間にか声を上げていた。
「どうしたのよ！？」
驚きを隠せずに戸惑う美由紀。
いや、だって…私の首に傷のこしたのコイツなんだもの！！

「昨日のはコイツなのよ！！」
特に特徴的の顔ではなく比較的平凡な顔。
そっちの方が逆に覚えやすいんだよね。
「いや、あんたの指差してんの今日転校してきたアルビオン・ルード・マクロー君だから」
えええ！！！そうなの！！！
この顔でそんな外国風味な名前なの許せないんですけど…！！
ていうか完全に名前負けしてるよ。
「私、初耳なんですけど…」
確かに朝来たが転校生なんてどこにもいなかった。
「あんた遅刻して二限目に来たでしょうが」
言われてみればそうだった。
今日は何時も以上に体が重く、動きたくない衝動に駆られ起き上がれず遅刻した。
私は深く考え込んでうろうろしていると机の下で怯えているアルビオンを発見した。
「ななな何で…ここに居られるんデスカ」

震える声で怯える涙目なアルビオンという名の青年。
オイオイオイ…捕って喰う訳じゃないんだから…。
にしても、震えすぎだろう。
そんなに私怖いかなあ…。
顔を触るが、そんなに怖い顔をしているとは思えなかった。
何を思ったのか、アルビオンは私の腕を掴んで走り出す。
ちょっちょ…どこにいくのさ！？
後ろで美由紀が色々と騒いでいたけどうまく聞き取れなかった。
☆
アルビオンが連れてきたのは屋上だった。
睨み付けると軽くアルビオンが５ｍぐらい離れる。
どんだけ私怖いんだよ。
「で、何」
機嫌悪くアルビオンにそんな言葉を投げつける。
アルビオンは少し黙ると「君のせいで」と呟いた。
「何？」

睨みを利かせるとまた逃げた。

お前…後で覚えておけよ。

「君のせいで…ヴァンパイアハンターとか退魔師とかに追われるわ、ご飯を食べ損なうわで大変だったんだからな！！！」

ちょっと待てそれは私のせいじゃない。

しかし、涙目で迫ってくる男に何も言えなかった。

「僕はお腹すいて仕方なく鼠の血を飲んだんだぞ！！病気になったらどうすんだよ！！」

そんなの私の知ったことではない。

溜め息をつきながら目を逸らす。

その態度が気に入らなかったのか、肩を勢いよく押された。

やべえ、倒れる。

案の定固いコンクリートの上に倒れ込んだ。

背中痛っ！？

かろうじて頭を打ちつけなかったが、背中がものっ凄く痛かった。

その上にアルビオンは乗っかる。

あれーコレって…まさかアレだよな。

押し倒されてる☆

じゃねぇぇぇ！！！！！

私は渾身の力を込めて蹴り上げる。

勿論狙いは男の急所。

吸血鬼に男の急所が効くのか分からないけど！！

「ギャアア！！！」

効いた。

かなり効いた。

うずくまって悶絶している。

「自業自得ね」

鼻で笑ってやった。

「あ～あ…何やってんやって…」

不意に後ろから声が聞こえた。

後ろを見れば黒いフードを被った金髪の男。

片手の大鎌がいやに光った。

うわぁ…ああいう格好してる奴ってコスプレ大好きッコか頭痛い人だよね～。

または本当に死神か。

まあ、その可能性は薄いけど。

頭痛い人けってーい。

「ルードか…なんだ？」

知り合いかよ。

なんか吸血鬼とか黒いフードと大鎌とかさもうファンタジーだよね。

さっきから思ってたけどさあ…。

「いやぁ別に…たまたま飛んでたらいたからさあ。ところで、アル君。」

馴れ馴れしいなあコイツ。

ていうかアル君って…笑えるわあ。

「あの嬢ちゃん誰？」

「昨日血吸うの失敗しちゃって…姿見られた」

「あっちゃあ…やっちゃったねぇアル君」
何やらぶつくさと何かを言っている。
何さ、私は悪く無いよ！！
「何で記憶消さんかったん？」
「だって昨日…初めてだったんだもんそれに…僕魔術関係苦手で」
「君なあ…よくそんなんで吸血鬼やってられるな」
「前、犬の記憶消そうとしたら犬が爆発した」
「センスないなあ…アル君。普通爆発せえへんって」
「そういや、お前…死神だったよな！？魔術なんてお茶の子さいさいだろう！！」
あれ？死神聞こえたよ？
気のせいだよね？気のせいだと信じてる。
「そうやけど…死神長に魔術とか監視されてるん…始末書書いてくれるならやってもいいんやけどな」
やべーものほんだわ～。
もしかして殺られる？やばいんじゃね？
「しょうがないな…始末書ぐらい書いてやるよ」

「よっしゃ！交渉成立やな！！」

私の頭に金髪男の手が置かれる。

キィーンと耳元で音がした。

「いっ……」

音がした後、猛烈に痛みが体中を駆け巡った。

痛っ！！ものっそい痛い！！

「アル君すまん！ちょっと力の入れ方間違えた」

「ええええ゛っ！？」

「詠唱抜きやっぱり駄目やった」

「馬鹿か！？だから何時も言ってんだろうが！！詠唱抜きは上級種族しか出来ないって」

「犬爆発させたアル君よりはましやで～」

二人がワイワイ騒いでいる間にキリキリした頭の痛みはかなり我慢の限界にいこうとしていた。

ヤバい…意識が…。

突っ込む気力も無いわ…もう。

「で、ちゃんと記憶は消えるのか？」

「当たり前やで～♪俺を誰やと思っとんの」

あれ？何か頭のなかでプッチンって音したよ？

あれ？頭痛く無くなった。

身体も軽い。

ゆらりと立ち上がる。

「え〝っ！？え〝ぇ！！何であの子立ち上がってられるの？ルードぉぉぉ！！？？」

「知らんわ！！俺は知らんで！？」

「何か殺意まで見えるんだけどぉぉぉ！！？？」

「ちょっ！！君恐いわぁぁぁ」

怯える二人が見えると私は勢いよくぶっ倒れた。

最後に見えたのは怯えて肩を寄せ合う二人だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1227d/

moonnight

2010年10月10日09時07分発行